

〈原 著〉

第1回世界形選手権大会における審査員間の評価の差異に関する研究

菅波 盛雄*・廣瀬 伸良*・中村 充*・前川 直也**

A study on the differences in the evaluation between judges
in the 1st World *Kata* Judo Championship

Morio SUGANAMI*, Nobuyoshi HIROSE*, Mitsuru NAKAMURA* and Naoya MAEKAWA**

Abstract

The purpose of this study was to examine the differences in evaluation between judges in the 1st World *Kata* Judo Championship using multivariate analysis. Scores for each team given by individual judges were transformed into ranks; we obtained the rank correlation and performed the Kendall rank correlation test to investigate the significance of the correlation between judges.

The analysis showed that (1) rank correlations between judges in two preliminary competitions were highly correlated except for two *katas*; (2) five groups in the preliminary competitions and one group in the final competition within 15 groups (three competitions times five *katas*) were found to have a high Kendall's coefficient of concordance among judges; (3) the rank correlations of four out of five *katas* in the final competition had low positive values.

In the championship, 26 judges from 16 countries had to evaluate 112 teams from 23 countries; some judges felt obliged to higher scores to the team of their own country. Needless to say, such a situation caused so-called biased evaluations.

As a conclusion, we should active an institute for judgment of *kata* championships and make further efforts to construct universal standards for judging *kata* in order to reduce the risk of unfair evaluations.

Key words: judo, *Kata* championship, evaluation, Kendall rank correlation test

I. 緒 言

柔道には段位制度がある。柔道を練習する者が昇段するには、試合成績と形の審査が課題となる。つまり、柔道の習熟段階を「形」と「乱取」から評価している。柔道練習者にとって「形」と「乱取」の両方を修養し、その「技術」と「精神」を磨くことが昇段のための要件とされている⁹⁾。そのため、柔道において「形」と「乱取」はその両軸とされてき

た。

しかし、オリンピックや世界選手権の隆盛に見られるとおり競技柔道が台頭し、形は昇段の際にのみ練習されている場合が少なくない。こうした状況を背景に全日本柔道連盟(以下、全柔連と略す)は、1997年(平成9年)第1回全日本柔道形競技大会を開催⁵⁾した。そして、2006年第10回大会を経て翌2007年には講道館柔道形国際大会⁶⁾が開催された。

一方、国際柔道連盟(以下、IJFと略す)は2008年11月に形ワールドカップ・パリ大会を開催²⁾した。この大会に至る過程として、ヨーロッパ柔道連盟は2004年¹⁾、2006年³⁾、2007年⁴⁾と3度の欧州形選手権大会を開催している。そしてIJFは、2009年第

* 順天堂大学 大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of health and sports science, Juntendo University

** 徳山工業高等専門学校
Tokuyama College of Technology

1回世界形選手権大会を開催した。ゆえに2008年の形ワールドカップは、審査方法や審査員選考も兼ねた大会運営の予行演習²⁾を意味していた。そのため各大陸連盟は前段階として、各大陸連盟での審査員選考試験⁷⁾の実施を迫られた。

IJFによる審査システムは、「KATA COMPETITIONS RULES¹⁰⁾」に決められているが、我が国が1997年から開催している全日本柔道形競技会の審査方法とは異なる。本研究では、2009年10月にマルタ共和国で開催された第1回IJF世界形選手権大会での審査員間の評価の差異に関して検討を試みたものである。

II. 研究方法

1. 分析対象大会

(1) IJF世界形選手権大会

平成21年10月17・18日

(マルタ共和国, ベレッタ市, コットネラ・スポーツ・ホール)

(2) 競技種目…投の形, 固の形, 柔の形, 極の形, 講道館護身術の計5種目

(3) 競技形式…各形共エントリーしたグループを原則として同数の予選第1グループと予選第2グループの2グループに分けて実施, 各グループ上位3グループの計6グループが決勝戦へ進む。

2. 審査方法

(1) 審査員は5名で1チームを組み, そのチームが第1グループの形全てを審査する。第2グループの審査は異なる審査員5名のチームが審査する。決勝戦は決勝戦を審査する審査員5名が改めて各形毎に選考され審査する。

(2) 審査方法は一つの施技(10点満点)から減点する方式⁸⁾であり, 小さなミス(2個記録, 1個-1点)・中位のミス(1個のみ記録, -3点)・大きなミス(1個のみ記録, -5点)とする。図1に示すとおり, 投の形を例にすると各技のほか, 1のOpening Ceremonyと17のClosing Ceremony, 18のFluidity, Course,

EVENT:		Nage No Kata				
DATE:						
		No.	Family Name	Given Name	Country	
JUDGE						
Demo No.		Small Mistake	Medium Mistake	Big Mistake / Wrong Technique	Forgotten Technique	Score
		1	3	5	10	Total
1	Opening Ceremony					
2	Uki Otoshi					
3	Seoi Nage					
4	Kata Guruma					
5	Uki Goshi					
6	Harai Goshi					
7	Tsurikomi Goshi					
8	Okuri Ashi Harai					
9	Sasae Tsurikomi Ashi					
10	Uchi Mata					
11	Tomoe Nage					
12	Ura Nage					
13	Sumi Gaeshi					
14	Yoko Gake					
15	Yoko Guruma					
16	Uki Waza					
17	Closing Ceremony					
18	Fluidity, Course, Rhythm					
TOTAL						

図1 形審査スコアシート

Rhythmの得点に加えられて合計180点満点になる。審査員はそれぞれの演技の中のミスや出来映えについて, 図1に示す表の中に減点を意味する×印をマークしてゆき, 先に述べた規定に従って減点がなされる。得点の合計については係員に一任される。

(3) 最高点と最低点を除外し, 残りの3名の合計点が得点となる。

(4) 参加国数は, ヨーロッパ14, パンナム4, アジア3, オセアニア1, アフリカ1の計23カ国82組164名であった。

(5) 個々の審査員が各チームに与えた評価点を順序データに変換し, 審査員間の評価の類似性を多変量解析の手法を用いて分析を行った。

III. 結果

表1~表5の見出しについて, 先頭の英数字P1, P2, F1は順に予選第1グループ(組), 予選第2グ

表1 投の形における各組の順位相関係数の検定

予選1組の順位相関係数の検定

	P111	P112	P113	P114	P115
P111	—	0.0046	0.0578	0.1159	0.1119
P112	**	—	0.0277	0.0218	0.0578
P113		*	—	0.0464	0.0261
P114		*	*	—	0.0350
P115			*	*	—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

予選2組の順位相関係数の検定

	P211	P212	P213	P214	P215
P211	—	0.0052	0.0052	0.0242	0.1508
P212	**	—	0.0016	0.0039	0.0071
P213	**	**	—	0.0029	0.0071
P214	*	**	**	—	0.0023
P215		**	**	**	—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

決勝戦の順位相関係数の検定

	F111	F112	F113	F114	F115
F111	—	0.2511	0.3305	0.0558	0.0217
F112		—	0.0074	0.1885	0.0909
F113		**	—	0.2511	0.1260
F114				—	0.0146
F115	*			*	—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

表2 固の形における各組の順位相関係数の検定

予選1組の順位相関係数の検定

	P121	P122	P123	P124	P125
P121	—	0.1067	0.0747	0.1730	0.0747
P122		—	0.0054	0.0323	0.0054
P123		**	—	0.0123	0.0008
P124		*	*	—	0.0035
P125		**	**	**	—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

予選2組の順位相関係数の検定

	P221	P222	P223	P224	P225
P221	—	0.1730	0.0464	0.0464	0.1159
P222		—	0.0123	0.0371	0.0123
P223	*	*	—	0.0035	0.0035
P224	*	*	**	—	0.0035
P225		*	**	**	—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

決勝戦の順位相関係数の検定

	F121	F122	F123	F124	F125
F121	—	0.0217	0.3305	0.0323	0.0323
F122	*	—	0.4442	0.1260	0.0217
F123			—	0.5593	0.1731
F124	*			—	0.1731
F125	*	*			—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

ループ, 決勝戦を表している. 先頭から3番目の数字は競技種目を示し, 投の形1, 固の形2, 柔の形3, 極の形4, 講道館護身術5である. 先頭から4番目の数字1~5は, 5名の審査員を区別するために付した番号である. したがって例えばP111は予選第1グループの投げの形の番号1の審査員であることを示している. 技数が15本で完結する投の形, 固の形, 柔の形は180点満点, 居取と立合で計20本の極の形は230点, 徒手の部と武器の部で計21本の講道館護身術は240点となる.

1. 投の形

投の形は予選第1グループが9チーム, 同第2グループが10チーム, それぞれ上位3チームの計6チームが決勝戦へ進んだ. 審査は全25チームについて

行われ, 担当したのは9名であった. 予選の両グループと決勝を担当したのは2名, 予選1グループと決勝各1グループ計2グループを担当したのが2名, 残りの5名は予選のみ4名と決勝のみ1名であった. 審査のシステムにより最高点と最低点が除外され, 中間3名の合計点で順位が決定するために, 審査員の採点の採択・不採択が重要になってくる. 9名の審査員の中で不採択率が80%から90%と高い値を示しているのが3例みられた. 得点差は, 予選で最大38点, 最小9点であった. 決勝は最大21点, 最小10点であった.

次に審査員間の評価に類似性があるかどうかの検討を行った. 表1にはケンドールの順位相関係数を求めたうえで, 検定を行い上三角の欄にp値を表

表3 柔の形における各組の順位相関係数の検定

予選1組の順位相関係数の検定

	P131	P132	P133	P134	P135
P131	—	0.0133	0.1051	0.0088	0.0088
P132	*	—	0.2618	0.1051	0.0041
P133			—	0.0595	0.3149
P134	**			—	0.0786
P135	**	**			—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

予選2組の順位相関係数の検定

	P231	P232	P233	P234	P235
P231	—	0.0397	0.3414	0.0209	0.0215
P232	*	—	0.0246	0.0019	0.0005
P233		*	—	0.0567	0.0613
P234	*	**		—	0.0000
P235	*	**		**	—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

決勝戦の順位相関係数の検定

	F131	F132	F133	F134	F135
F131	—	0.2511	0.1885	0.0558	0.5730
F132		—	0.0217	0.0798	0.2511
F133		*	—	0.0558	0.1885
F134				—	0.1260
F135					—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

し下三角欄に判定*:5%, **:1%を示した. 上から予選第1グループ, 同第2グループ, 決勝の順である. 予選第1グループでは, 6例の順位相関が高いことが確認された. 5名の審査員を2名一組にして順位相関を検討した場合, 全部で10のペアができる. この10ペアの内6ペアの審査員の評価が類似していることを示すものである. 同様に予選第2グループにおいても, 9例の順位相関がきわめて高いことが確認された. 決勝は6チームのみで, F112とF113の間に高度の有意な順位相関が認められ, F115がF111とF114と有意な順位相関が認められた.

2. 固の形

固の形は予選第1グループが9チーム, 同第2グ

表4 極の形における各組の順位相関係数の検定

予選1組順位相関係数の検定

	P141	P142	P143	P144	P145
P141	—	0.0065	0.0065	0.0008	0.0340
P142	**	—	0.0030	0.0088	0.0178
P143	**	**	—	0.0088	0.0041
P144	**	**	**	—	0.0444
P145	*	*	**	*	—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

予選2組の順位相関係数の検定

	P241	P242	P243	P244	P245
P241	—	0.0107	0.0509	0.0243	0.0062
P242	*	—	0.0107	0.0243	0.0151
P243		*	—	0.0243	0.0683
P244	*	*	*	—	0.0683
P245	**	*			—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

決勝戦の順位相関係数の検定

	F141	F142	F143	F144	F145
F141	—	0.0157	0.0388	0.1885	0.0388
F142	*	—	0.0157	0.0441	0.0157
F143	*	*	—	0.0388	0.0388
F144		*	*	—	0.0388
F145	*	*	*	*	—

[上三角:P値/下三角:判定(*:5% **:1%)]

ループが9チーム, 決勝6チームで全24チームの審査が行われた. この審査を担当したのは12名, 予選と決勝各1グループ計2グループを担当したのが3名, 残りの9名は予選のみ7名と決勝のみ2名であった. 12名の審査員のうち, 不採択率が80%から90%と高い値を示しているのは1例のみで, 60%から70%の間に2名みられた. 得点差は, 予選で最大37点, 最小7点であった. 決勝は最大25点, 最小6点であった.

次に審査員間の評価に類似性があるかどうかの検討を行った. 表2は固の形について審査員間の Kendallの順位相関係数を求め検定を行ったものである. 予選第1グループでは, 6例の順位相関が高いことが確認された. このなかの4例は高度の順位相

表5 講道館護身術における各組の順位相関係数の検定

予選1組の順位相関係数の検定

	P151	P152	P153	P154	P155
P151	—	0.0107	0.2931	0.0107	0.0985
P152	*	—	0.6523	0.0016	0.0243
P153			—	0.6523	0.6523
P154	*	**		—	0.0243
P155		*		*	—

[上三角:P値/下三角:判定 (*:5% **:1%)]

予選2組の順位相関係数の検定

	P251	P252	P253	P254	P255
P251	—	0.1765	0.0985	0.4527	0.1765
P252		—	0.0243	0.0509	0.0509
P253		*	—	0.0243	0.0243
P254			*	—	0.0107
P255			*	*	—

[上三角:P値/下三角:判定 (*:5% **:1%)]

決勝戦の順位相関係数の検定

	F151	F152	F153	F154	F155
F151	—	0.2511	0.8457	0.0114	0.0798
F152		—	0.0558	0.2511	0.0217
F153			—	0.8457	0.1731
F154	*			—	0.0798
F155		*			—

[上三角:P値/下三角:判定 (*:5% **:1%)]

関があることを示している。これらは10ペアの内6ペアの審査員の評価が類似していることを示すものである。同様に予選第2グループにおいても8例の有意な順位相関があり、なかでも3例は高度の順位相関がある。決勝は6チームのみでF121とF122, F124, F125並びにF122とF125の間に有意な順位相関がみられた。

3. 柔の形

柔の形は予選第1グループおよび同2グループともに8チーム、決勝6チームで全22チームの審査が行われた。この審査を担当したのは10名、予選第1・第2グループと決勝1グループの計3グループを担当したのが2名、予選と決勝各1グループの計2グループを担当したのが1名、残りの7名は予選

のみ5名と決勝のみ2名であった。10名の審査員のうち、不採択率が80%から90%と高い値を示しているのは2例、60%から70%の間に1名みられた。得点差は、予選で最大45点、最小7点であった。この予選での得点差は45点と44点の2件が確認された。このときの最高点は審査員が自国のチームに付けた点数であり、合計点による順位が5位と4位の結果であり決勝へ進むことはできなかった。また、この2件での最小点は同一の審査員であった。決勝は最大25点、最小6点であった。

次に審査員間の評価に類似性があるかどうかの検討を行った。表3は柔の形について審査員間のケンドールの順位相関係数を求め検定を行った結果である。予選第1グループでは、4例の順位相関が確認された。この中の3例には高度の有意な順位相関が認められる。この10ペアの内4ペアの審査員の評価が類似していることを示すものである。予選第2グループにおいては、7例の順位相関が高く、なかでも3例は高度の順位相関がみられた。決勝は6チームのみでF132とF133に有意な順位相関が認められた。なお、2位、3位は同一国のチームであり、この決勝の審査を担当した審査員の一人は、自国のチームに与えた点数が、優勝したチームに与えた点数よりも高い。しかも優勝チームへは最小点を出し、最高点よりも22点低い。

4. 極の形

極の形は予選第1グループが8チーム、同第2グループが7チーム、決勝6チームで全21チームの審査が行われた。この審査を担当したのは11名、予選と決勝各1グループの計2グループを担当したのが4名、残りの7名は予選のみ6名と決勝のみ1名であった。11名の審査員のうち、不採択率が80%から90%と高い値を示しているのは1例、60%から70%の間に1名みられた。得点差は、予選で最大37点、最小7点であった。決勝は最大25点、最小6点であった。

次に審査員間の評価に類似性があるかどうかの検討を行った。表4は極の形について審査員間のケンドールの順位相関係数を求め検定を行った結果であ

る。予選第1グループでは、10例に有意な順位相関が認められ、そのうちの7例に高度の有意な順位相関がみられた。これは全10ペアの評価が類似していることを示すものである。予選第2グループにおいては、7例に有意な順位相関が認められ、なかでも1例は高度の順位相関があった。決勝は6チームのみで、9例に有意な順位相関が認められた。この形においては、全てのグループにおいて高い順位相関が確認された。

5. 講道館護身術

講道館護身術は予選第1グループおよび同第2グループも7チーム、決勝6チームで全20チームの審査が行われた。この審査を担当したのは11名、予選と決勝各1グループの計2グループを担当したのが4名、残りの7名は予選のみ6名と決勝のみ1名であった。11名の審査員のうち、不採択率が80%から90%と高い値を示しているのは2例、70%から80%の間に1名みられた。得点差は、予選で最大44点、最小10点であった。決勝は最大29点、最小6点であった。

次に審査員間の評価に類似性があるかどうかの検討を行った。表5は講道館護身術について審査員間のケンドールの順位相関係数を求め検定を行った結果である。予選第1グループでは、5例に有意な順位相関が確認され、その中の1例に高度の有意な順位相関がみられた。この10ペアの内5ペアの審査員の評価が類似していることを示すものである。予選第2グループにおいては、4例に高度の順位相関がみられた。決勝は6チームのみでF151とF154、F152とF155に有意な順位相関が認められた。

6. 同一国のチームと審査員

審査員は23カ国から総員26名で審査を担当した。しかし、2008年のIJF形ワールドカップの際の資格認定試験において、ライセンスは形ごとに認定されるため、必ずしも全ての形にパスして審査資格を取得しているわけではない。そのために、同一国のチームの審査を同一国の審査員が担当するケースは避けられない事情がある。表6は同一国のチームの審査を担当した同一国の審査員の数と、これら審査

表6 同一国チーム・審査員

	計	同一国 チーム	不採 択	最高 点	最小 点	同一 国率 (%)	不採 択率 (%)
投の形	25	7	4	4	0	28.0	57.1
固の形	24	8	5	4	1	33.3	62.5
柔の形	22	8	7	6	1	36.4	87.5
極の形	21	8	3	3	0	38.1	37.5
護身術	20	9	3	2	1	45.0	33.3
計	112	40	22	19	3	35.7	55.0

員の採点が不採択となった数を示したものである。投の形、固の形、柔の形においては、これらの審査員による不採択率が高い傾向が窺える。

7. 審査員の担当形および不採択率

表7は今大会において、審査を担当した形およびその数を表した。審査員個々の採点記録から担当した形と不採択となった率を算出し、さらに国別に並べたのちにアルファベット順に並べた。不採択率は当該審査員が担当した審査の回数を採点が不採択となった回数で除した値である。担当した審査が1種類で不採択率の高い審査員の存在など、現段階では審査員間の演技に対する評価、採点に関しての差異が存在していると考えられる。ゆえに、多い人はひとつの形すべての組で審査を務めるなど弊害がみられる。そのために自国の審査に加わることもある。しかし、採点競技であるために、自国の審査には極力は加わるべきではないと考える。審査員の経験年数、自らがその形を実際に修行しているかどうか、そう考えてゆくと、実質的に審査を任せるに値する質の高い審査員を捜し出すのは困難であると推測される。また瞬時に展開される演技のミスを見つけ出すことは可能であろうが、運動の質、出来映えなどの面から総合的に判断し、採点することには困難が予想される。

IV. 考 察

本研究は、世界形選手権大会の審査員の採点について検討を試みた。従来の競技柔道とは違って採点競技であり、公表されている点数を元にしての分析

表7 審査員の担当形および不採択率

審査員	投の形	固の形	柔の形	極の形	護身術	不採択率(%)	担当回数
W	○					90.0	10
B		○				88.9	9
T	○				○	75.0	16
I	○					60.0	15
V		○		○		58.8	17
K			○	○		56.3	16
R		○	○	○		52.4	42
U			○			50.0	8
A	○			○	○	48.3	29
J		○				44.4	9
E		○	○		○	44.1	34
Z					○	42.9	7
H	○	○		○		41.4	29
L		○		○		37.5	16
M	○		○	○	○	37.5	32
X			○			37.5	8
P			○		○	37.4	35
D	○			○		36.8	38
Y			○		○	33.3	15
N		○		○		32.1	28
O		○			○	31.3	16
G		○	○		○	26.8	41
S	○				○	26.3	38
Q		○		○		18.8	16
F		○	○	○	○	17.6	34
C	○					10.0	10

(審査員の個々の採点記録から担当した形と不採択となった率を算出し、さらに国別にアルファベット順に並べた。)

である。各形の審査員5名のグループ間の順位相関は決勝よりも予選のグループにおいて顕著に認められた。この傾向について、1%水準で有意差のみられた数と5%水準での有意差の認められた数を併せて9以上、または同様に併せて6以上あり、かつその中に1%水準での有意差が2つ以上あるグループの場合は、審査員のケンドールの一致係数Wが0.8以上であり全員の一致度が極めて高いといえる。これは予選10グループ中5グループで確認されたが、決勝5グループにおいては、極の形1グループのみであった。これは予選リーグにおいて、演技者間に明らかに差異があるために優劣が付けやすい

と見ることができる。一方、予選各グループの上位3名からなる決勝は、チームのレベルもある一定の水準以上であり差が付けにくいとみることができる。

同一国のチームの審査を同一国の審査員が行う例を表6に示した。

現状では、審査委員の問題も考えられるために一概に妥当ではないと言い切れない。しかし、現実には柔の形のように決勝において5名中4名の審査員が優勝チームに最高点を出しているのに対して、自国の2チームよりも低い採点をしている審査員もみられた。この点については、初めての世界選手権大会であることからこうした自国最良の採点・評価は回を重ねるにつれて是正されてゆくものと考えられる。

審査員は表7に示すとおり、16カ国26名が担当した。多い審査員で4種類、少ない審査員は1種のみ担当した。担当した審査の数は決勝のみ6グループであるが、予選はそれぞれ7から10グループあり予選と決勝および数種類の形の審査を行うと一番多い審査員で3種42例となる。これが4種ともなると審査に対する負担が大きくなる。次に、審査の過程での不採択となった採点である。今回は担当した形でそれぞれ不採択になった数を取り上げず、一人の審査員の全てを併せたものとして分析した。なお、各グループのグループ数の数に係わらず5種類の形で予選第1・第2グループと決勝で合計15回、26名の審査員が5名一組で審査を担当すれば各グループ3回ですむ計算となる。しかし、現実には審査員の資質なども関係するものと推測される。

競技形式の柔道形は、歴史も浅いために現状は試行錯誤の過程にあるといえる。長い歴史の中で採点の規則を練り上げてきた、他の採点競技種目とは明らかな差異があることは認めざるを得ない。懸念されるのは、審査員間の採点の開きでありそれによって引きおこされる順位の変動である。本研究では、それらの問題への基礎資料を提供するべく、ケンドールの順位相関係数によって、公表されている得点を用いて解析を試みた。

同じ演技を見て採点し、しかも同じ基準で減点し

てゆく方式にも拘らず採点に差が生じる。ある意味で採点競技の宿命ともいえる。そのために5名の審査員の中から最高点と最低点を除外し、疑問視される採点を除外しようと試みている。しかし、現実には自国の選手により高い採点をして、それ以外のチームには不当に低い採点をする例もみられた。審査員の採点と実際に採用された得点との開きをみて、疑問視される採点を排除していくシステムの構築が望まれる。並行して、審査員の研修を活性化し採点基準の統一化を図る努力を続けることが必要であろう。また、利害関係が考えられる審査員については、起用しない方向で検討されるべきであろう。乱取り試合では、自国の審査には加わることはないので参考になるであろう。

本研究の採点の検討からも、審査員の資質に関して問題点があることが指摘できる。今後は、実質的に審査を任せるに値する審査員の育成が急務であるといえる。

V. 結 論

第1回世界形選手権大会における審査員間の評価について、ケンドールの順位相関係数とその検定を用いて検討した結果、次のことがわかった。

- (1) 予選各グループにおける審査員間の順位相関は、柔の形、護身術の一部を除いて高いことが確認された。
- (2) 5種類の形を予選第1・第2グループと決勝を併せた計15グループ中、審査員のケンドールの一致係数Wが0.8以上であり全員の一致度が極めて高いのは、予選で5グループ、決勝で1グループであることが確認された。
- (3) 決勝における審査は、極の形を除く4種類の

形で審査員間の順位相関が高くなかった。

- (4) 5種類の形に23カ国82グループ164名の選手が参加する大会の審査員は16カ国26名であった。しかし、実際は複数の形にも出場できるため112グループの演技が行われた。そのために審査員と同一国のチームの審査を担当せざるを得ない状況がみられた。

参 考 文 献

- 1) 藤田真郎 (2005). 欧州形競技大会視察報告. 柔道 76 (1), 71~77
- 2) 松下三郎, 村田直樹, 藤田真郎 (2009). 2008国際柔道連盟形ワールドカップ・パリ大会視察報告. 柔道 80 (2), 87~94
- 3) 松下三郎, 村田直樹 (2007). 第3回欧州柔道「形」選手権大会視察報告. 柔道 78 (1), 41~49
- 4) 松下三郎, 村田直樹 (2007). 第2回欧州柔道「形」選手権大会視察報告. 柔道 78 (7), 74~81
- 5) 村田直樹 (1997). 第1回全日本柔道「形」競技大会. 柔道 68 (11), 4~11
- 6) 村田直樹 (2008). 第1回講道館柔道「形」国際競技大会を終えて. 柔道 79 (1), 52~54
- 7) 大辻広文 (2008). アジア柔道連盟「形」審査員ライセンス試験. 柔道 79 (9), 94~96
- 8) 佐藤 正, 永井多恵子 (2009). 「IJF形ワールドカップ2008」に派遣されて. 柔道 80 (2), 95~101
- 9) 藤堂良明 (2007). 柔道の歴史と文化. 239-242, 不昧堂出版
- 10) *World Kata Championship IJF judo Show Cup 2009 COMPETITION RULES* http://www.intjudo.eu/pictures/calendar/510_1_3.pdf

(平成21年11月27日 受付)
(平成22年2月17日 受理)